

# アフリカの人々と名付け 7

エイズ発生の歴史を映すか——  
底知れぬ悲嘆を宿す二ヨ口の「叙死名」

小馬 徹

## 「嘆き節」としての名付け

前回、内面に蟠った家族や隣人に対する鬱憤の表明のために、親たちが赤ん坊の名付けを利用する慣行を論じた。そして、それは邪術や妖術の観念が卓越した制裁力となっている諸社会に広く見られる慣行だと述べた。

ミドルトン、ルグバラの女性たちが行う別の行動にも注目する。踊り、とくにニャムビと呼ばれる踊りでは、女たちは夫の欠点を仄めかし、しかもひどく猥褻な歌を高唱する。男たちもこの踊りの集会には手が出せない。もし妻を咎めようものなら、歌詞が益々酷くなる一方だとよく承知しているからだ。

童名にも、往々夫婦間の同様の緊張が滲んでいる。すると歌や名付けは、弱い立場にある女性が感情を素直に発露できる公認された回路の一つなのだ〔Middleton, J. "The Social Significance of Lugubara Personal Names", *The Uganda Journal*, 25(1), 1961〕。

では、ルグバラでは一体誰が赤ん坊を名付けるのか。その事情を知れば、解明されるべき事柄がまだあることに気付くだろう。

## 名付けるのは誰か

命名事情がやや似るテンボでは、両親がそれぞれ勝手に赤ん坊を名付ける〔梶茂樹「テンボ族における個人名」、『季刊人類学』16(1)、1985〕。だから、「知らなかった」（夫がこんなに人でなしだとは）とやられれば、夫は、例えば「開けてみるまではわからない」（高い婚資を支払ったのに、妻がぐうたらだと

は）と切り返す。母親が付けた名前が童名として通用するようになる例が多いのは、母親が自分の子供や近隣の子供たちに及ぼす影響の方がずっと大きいからに過ぎない〔梶茂樹「テンボ族における人名の言語的特徴」『季刊人類学』16(2)、1985〕。

一方ルグバラでは、事情が異なる。名付けは妻の「大権」とされ、夫の母親以外は介入できない。それでは、妻が夫ばかりでなく自分までも邪術師・妖術師だと告白し、恥部を殊更暴きたてる童名を好んで選ぶのは何故かという、当然の疑問が一層強く湧いて来る。

## 怨み歌としての名付け

ミドルトン、ニャムビを始めとする踊りに加え、類似の心理的機序が読み取れる別の行動にさらに言及する。ルグバラの女性たちは、夕方薪集めや水汲みに川へ出掛ける時にも歌を高唱する。この時、女たちは日頃夫の親族にあげつらわれている自分自身の落ち度を歌詞に読み込む。こうして、女たちは嫁たる者の辛さを言い立て、過酷な義務の忠実な履行を言い募る夫の親族の思いやりのなさや愚劣さに注意を引きつけようとするのだ。

姦通を疑われた時も、女性は同様に自分が姦婦だ、売春婦だと所構わず歌い歩く。さらに彼女は、踊りの場でも同じように歌う。これも夫の親族の過酷さへの殊更な当て付けであり、自分の正当性や独立性の主張でもある。女性は、この機会を捉えて夫方親族の権威の下で抑圧される感情に捌け口を与え、世間の

注意を強く引こうとしているのである。

すると、「殺意において」（母親は邪術師で他の女を殺した）、「多くの人が倒れた（死んだ）」（人々は父親が邪術師で人殺しだと言う）など、自分や夫を自ら貶めるような名前を好んで赤ん坊に付ける事も、全く同様の観点から解釈すべきだ、とミドルトンは結論付けている〔Middleton, 前掲書〕。つまり、この場合、女性は自分や家族の非倫理的な振る舞いを告白しているのではない。実は、彼女は、そのような濡れ衣を着せて自分の家族を苦しめる、隣人である夫方親族たちの無分別と冷酷さを告発しているのである。

### 底知れぬ悲哀と諦念

誰かに向けたメッセージとして想定される命名慣行のこのような社会的機能は、程度の差はあれ、ルグバラばかりではなくニョロやテンボでも共通の特性として確認できるものである。すると、これら三つの社会の命名慣行には、他にも「叙死名」という重要な共通項がある事に更めて思い当たるだろう。

私が仮に「叙死名」と呼ぶ範疇の名前は、今まさに名付けようとしている我が子が遠からず死ぬことを吐露する名前であった。私は、「叙死名」にこめられた深い悲嘆と恐れは、親の胸中から真っ直ぐに湧き出して吐露されたものであり、機能的であるよりはむしろ叙述的な性格のものであろうと述べた。小川了氏は、梶茂樹氏が論文の中で「どうせこの子もすぐに死ぬだろう」という親の捨て鉢な気分を記述している事を見咎めたが、その記述は恐らくリアルなものであろう、と。

ただ、上記三民族の「叙死名」を比較する時に、同時に、大きな「量的な差異」を認めておかなければならない。ルグバラ人とテンボ人の間では、「叙死名」は数えるほどしか見い出されていない。また、「死は鳥のように啄む」、「死は自ら楽しむ」、「一日」（ももつまい）、「明日死ぬだろう」、「何の役に立

つ」など、ニョロの「叙死名」からは容易に底が窺えないほどに深い悲哀と諦念をこめた呟きが聞こえて来るように思えてならない。それらの名前は、一度耳にするだけでも真に恐ろしい響きを伴ってはいまいか。

### エイズの起源を記録する「叙死名」

ビーティーは、ニョロではマラリア、梅毒、赤痢、癩病ばかりでなく、「特に19世紀にもたらされた（と思われる）性病が風土病である」ことを、夥しい数の「叙死名」が存在する背景として挙げる。さらに注目すべきは、彼が次のように書いた事実だ。「ニョロ人は、自分たちの人口が減りつつあると信じており」、「事実、現存する証拠が、大多数のアフリカの民族とは異なり、仮に減少はしていないとしても、ニョロ人の人口の停滞を示唆している」〔Beattie, H. M. “Nyoro Personal Names” *The uganda Journal* 21(1), 1957〕。

因みに、日本ではある土地の寺の過去帳を繰っていると、ある年に限って沢山の嬰兒（えいじ、乳児）・孩児（がいじ、幼児）の記述が連なる場合がある。これは、明らかにその土地で伝染病が流行った証拠である。

では、ビーティーが「性病」と記し、「人口爆発」が見られるアフリカとしては例外的にニョロ人の人口が停滞している最大原因と見たのは、一体どんな病気だったのか。思い切って推測すれば、エイズではなかったか。ウガンダ中部には、「瘦せ病」とかスワヒリ語で *kisukumi* と呼ばれる風土病があった。そして、HIV1のサブタイプAは、東アフリカを発祥の地とする。ニョロの「叙死名」には、名前の記号性ばかりでなくその社会的機能さえも超える、底知れぬ詠嘆の響きが聞き取れないだろうか。それは、エイズの発生と流行の歴史を映し取っていたからではなかったか——医学が明らかにする遙か以前に。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）